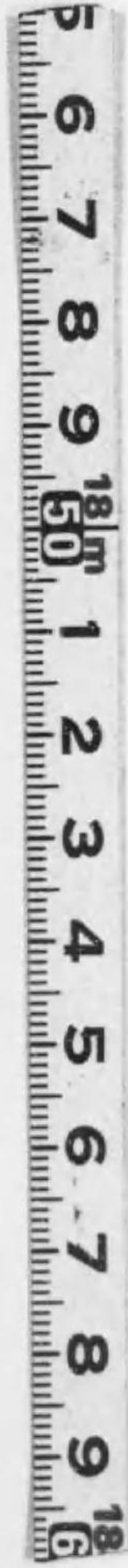


特 116

710



始



特116

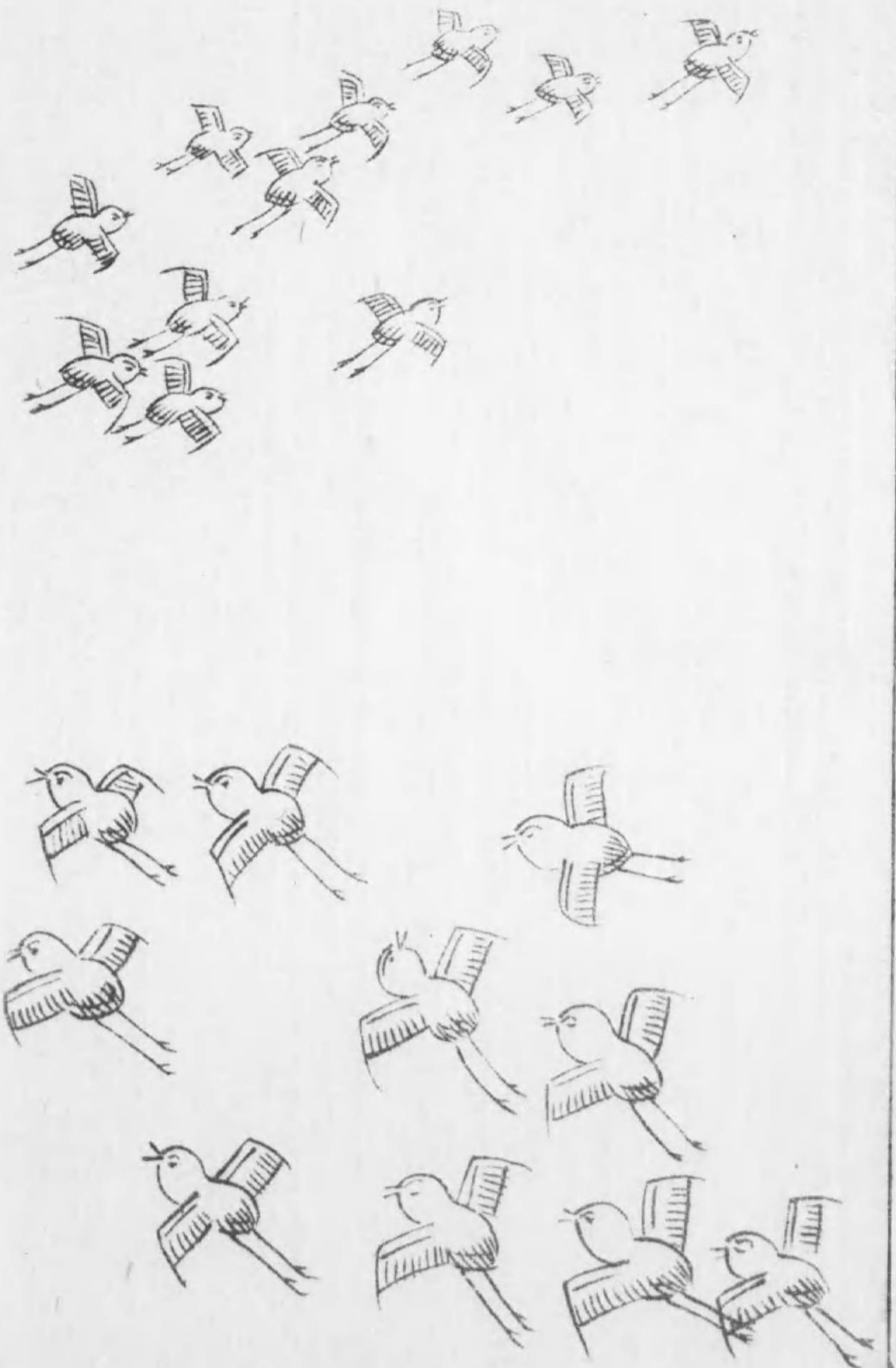
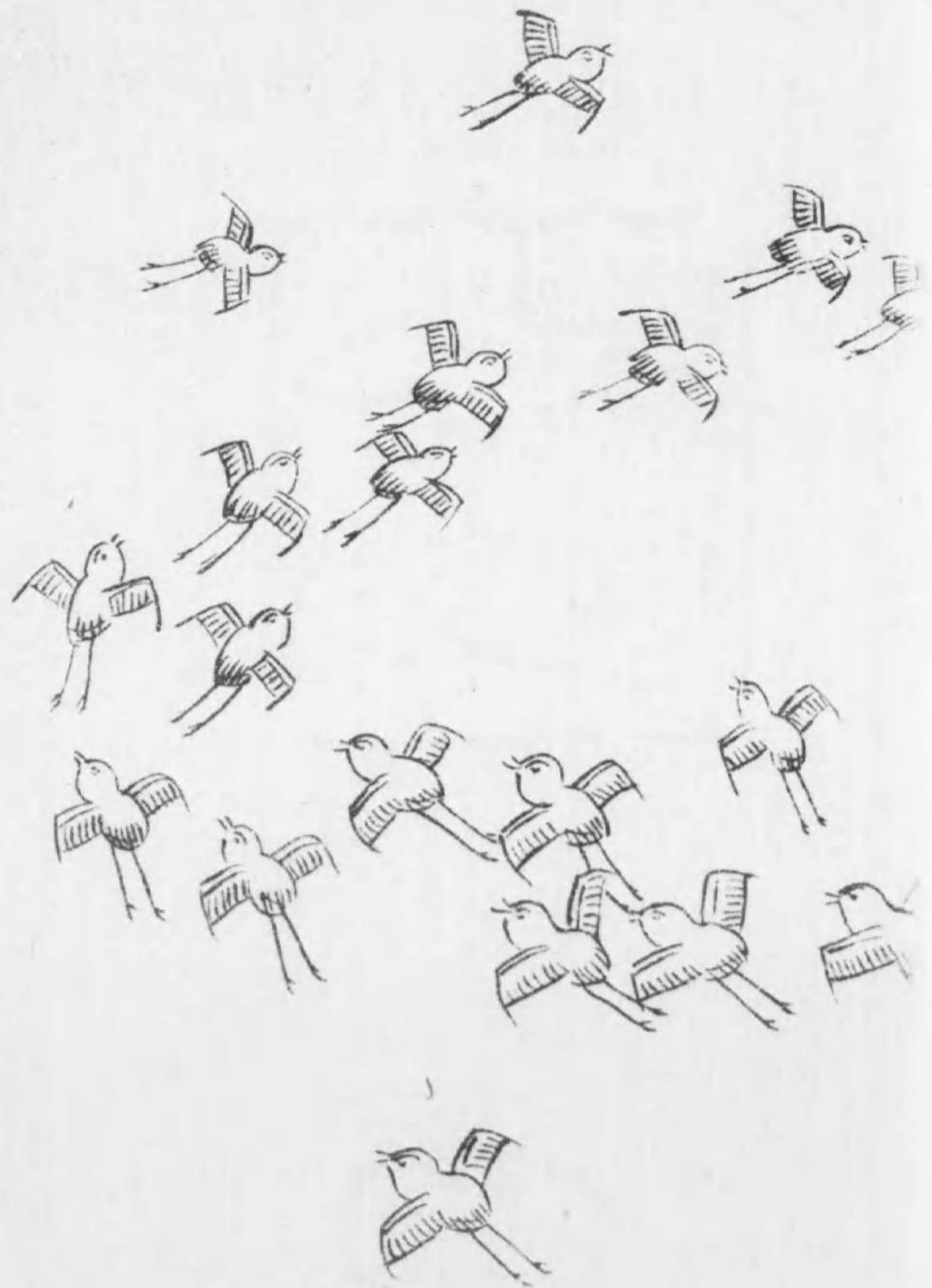
710

七騎落  
弱法師  
結上

觀世流改訂謄本

外十三





43116  
710



觀之  
清之

大正  
11. 2. 24  
内交

文學博士

明治四十年

井上頼國 本 文 監 修

丸岡世清 之 節 附 訂 正

丸岡桂 辭 解 并 補 訂

山崎樂堂 拍 子 附 訂 正

觀世流改訂本刊行會 節 附 樣 式 統 一

大山崎樂堂 拍 子 附 再 訂 正

### 七騎落

#### 解題

#### 詠方梗概

頼朝石橋山の合戦に敗れ舟に乗りて安房上總の方へ向かんとする時、主従八騎を乗るが不吉の例  
 とし、實平の子遠平を陸に送して所せしむるが望日海上にて和四義威の来りた遠平に、遠平  
 叔はれ其舟に在り、實平父子邂逅を喜ぶといふが作の大體なり。威義記平家物語を以て據りし作に  
 特別に曲據ありや、かゝ明を知らず、曲名澤風習道百録に見ゆ、能本作若柱文に作者不明。

(シテ) 数々の詞の變化が、此曲の最も至難なる所以は、充分師に就きて會得するからでは、忽ち此段  
 を憶ふべきた非ず。先づ次第は、積勢好く確りと流し、頼朝との問答は、火い下の取り、怒意に承け流  
 し、其後の「畏つて外」にて一旦、柳の向を取りて心持を別に、實平仰と流し、ついで「高」は以下、地  
 との掛合に移り、位をもち、かゝ此の地みなく、ハキクと承け流す。頼朝を承けての詞「畏つて外」を  
 靜に承け、火いの向を有ち、さて吃度思ひ定めたる味は、ひにて、いかに岡崎殿に「さ」と致めて、積聲を起して  
 出で、義實との問答の中、「いやくさやうの」さくは言ひわけの心にて依り、これは不思議なる「さ」を  
 さして、争はずに言ひ起し、「それ人は」さく以下、順次に確りと通す。さて其いは、これは火い下、尤に  
 て「さ」は分別能く承け、「いかに遠平」さくは思ひ返して、我が子に命ある心以下、それく心持を有ち、  
 いくつまで「さ」にて聲を下めに取る。「何と下りやうする」と「さ」は火いさくらのめに出で、「け」に  
 云くと氣を更へ、あれを見よ、以下、聲を起して、強めに言ひ、「一轉して」名残を惜し、けれの一句に無限の  
 情を持つ。カ、ルは更に氣を更へて、さくらのめに健やかなるべし。ワキ出で、後の「いかにあれは」さくの  
 詞は聲を起して、キツパリと向ひかけ、以下、問答こそ、つがめを程と、氣合に際し、同なく、連り取り、和四は  
 内々「さ」を、獨言の態にて下に取り、「いかに和四殿へ申す」と又聲を起し、次句を少く上に取り、「面もなきさ  
 事の外、以下、聊か聲を控ふ。あゝ、善くは、抜けぬやう確りと大きく出で、以下、尋常ならべく、其時、實  
 平「さ」は意外の出来事に對する複雑なる心持を表す趣なるべし。次の問答は、徳運に「主従共に」云くは  
 心晴れやかなる味を好く表し、「さ」は、いかに和四殿へ申す」と又聲を起し、次句を少く上に取り、「面もなきさ  
 らば、それと」云くをたゞかに扱ふ。頼朝(ツレ) 餘り位を取らず、積さくらのめなるが宜し。次第は同  
 る心にてかくつ。義實(ツレ) 老人は、聲を抑へ、いかに扱ふべきも、重くならざるを好。遠平(子方)  
 て、さくらべし。ます、詞の心持、徳運は、文意を味ひて、會得すべし。

七騎落

構上に取れてさうりと流ふ。要はどなきし。下地との掛合はロンギの心にて承け渡す。義威(ワキ) 確りと出づシテとの問答は文意に従つて

**辭解**

**怨み** 玉葉集の歌「恨みてもかひなき果の合はたな憂きたまわせとみるぞ」

**漸佐**

賴朝十三歳の時佐五位下左兵衛 権佐を授けられたりいふ。

**石橋山の合戦**

治承四年八月廿三日より廿四日間に及ぶ合戦。賴朝以仁王の命を奉り三万騎を

**七騎**

源平盛衰記に「兵衛佐殿に相提つて山に籠ける者は土肥次郎實平、同男速

**八騎**

源平盛衰記に上記七人外 同男速

朝云 平治物語に「義朝の一所に流ら(江州へ落ち)せし(す)ら せがひ たりつたれば 田代殿

**土屋の二郎**

實平の弟。土佐坊の威表記に「藤九郎威長、父は實平の舎人

**龍門原上**

和漢朗詠集に「龍門原上土埋骨不

**一の老體**

源平盛衰記に「二年六月の條に同男速平義實法師

**くが**

陸地を呼ぶ。所詮つと

**佐那田の餘一**

同男速平の子。元禄本天和本共に義實とあり。長門本に「眞田餘一義忠生

**副**

將軍を賜はり

**侯野**

大庭景親の弟。景久侯野五郎といふ。源平盛衰

**御介**

餘りの道理に云

**御説**

おほこごさかき

**御介**

餘りの道理に云

**かまへて**

覺悟 尋常に

**ゆ**

言清道

**松浦佐用姫**

宣化天皇の時九州松浦の佐用姫。夫大伴孫手彦が唐に赴き別

**御座船**

具度乗の船の意に

**立ち別れ**

波の縁に 心して 同情

**思子**

愛で思ふ子。飛びたつ

**あこがれ**

魂も身につかず 思ひ焦る事

**御座船**

具度乗の船の意に

**人知れず**

請を隔てあこがれ 思ひ焦る事

**御座船**

具度乗の船の意に

**弓張月**

上弦又は下弦の月。こゝには武通に寄せといふ

**御座船**

具度乗の船の意に

い 和田の小太郎 平家物語等には義盛の乗船と頼朝の船と行き違ひし時、来た味方と敵と  
も分らざりしが、頼朝船底に隠れて岡崎一人姿を出し居たり。義盛法師はいに河原、岡崎、我  
等も御行くと知らねば、尋ねぬなり。と答へて、義盛の法師を尋ねて頼朝船底より這り出  
で、違ひし事、また此時岡崎は石橋山にて與一の村れり。數き、義盛は小坪、たばかつて、浮  
衣並にて老父を捨て置き、たばかつて、たばかつて、たばかつて、たばかつて、たばかつて、たばかつて、  
かれ船 御前 貴人の心をつくさせ、氣をさせ、前には、引出物、賜り、仙家  
に入りし、和漢訓詁集に「深入仙家、難為半日之客、悲歸舊里、懐世之孫、母の玉、寶石室  
打ち居たり、驚き、家へ歸り見たり、いかに世變り、時移りて七世の孫の代になり居たりといふ故事、又  
劉辰旣肇の二人山中入つて、仙女に逢ひ、半年の後家に歸りて七世の孫に逢ひたりといふ故事、又  
りて作れ、某も一所に云、和漢訓詁集に「和漢訓詁集に「和漢訓詁集に「和漢訓詁集に」  
ら大庭の兵を地へ導きたるより思ひつきたるものにて、義盛は石橋山の合戦に頼朝の味方すべし、  
通下ながら、風浪又は洪水の爲に身加し、得ず、小坪にて、富山重忠（平家方）の軍に破られしものなり。  
不覺の涙の涙の意、何かつまん、古今集の歌、うれしきを何につま、むら、  
夕暮と續け、日暮れ月出、月の盃、盃の形を月に見立て、酒、次に盃取り、とり、一さし、  
づら心にて、次句を出す。 通下に入る、射らず、弓矢とい、引込、弓矢の家は武家、  
らたひの掛く、通下に入る、射らず、弓矢とい、引込、弓矢の家は武家、

四五 一番目 畧 二番

七騎落

八月

子方 土肥遠平 四 四人  
ツレ 岡崎義實 源頼朝  
ツレ 土肥太郎實平  
ワキ 和田義盛 狂言舟子

身ハ捨小舟 怨みても。身ハ捨小舟  
怨みても。おびあきや憂世あるらん

これハ兵衛の佐頼朝とハ我ラ事あり。

たつむきの石橋山の合戦よ身方うち

負け。餘り無勢よの程よ。一まづ安房

上總の方へ岡崎やと存い。いづよ土肥

頼朝行

實平次第上

ツヨク

身ハ捨小舟

怨みても

これハ兵衛

たつむきの

負け。餘り

上總の方へ

の次郎實平馬前頼朝の餘頼朝の身方無

勢頼朝もある向頼朝先安房上總の方入向

あつてもある向頼朝急頼朝で船の事を

申頼朝してはく實平思頼朝へん向頼朝船

の事を申頼朝してはく實平思頼朝へん向頼朝船

あつてもある向頼朝急頼朝で船の事を

申頼朝してはく實平思頼朝へん向頼朝船

の事を申頼朝してはく實平思頼朝へん向頼朝船

あつてもある向頼朝急頼朝で船の事を

申頼朝してはく實平思頼朝へん向頼朝船

の事を申頼朝してはく實平思頼朝へん向頼朝船

あつてもある向頼朝急頼朝で船の事を

申頼朝してはく實平思頼朝へん向頼朝船

の事を申頼朝してはく實平思頼朝へん向頼朝船

七騎  
七騎  
七騎

實平

頼朝

實平

頼朝

十騎

下



まらあがり。侍供の人数を見渡せら。  
 まづ一番より田代殿 地 まで二番より  
 新田の次郎 實平 又三番より土屋の三郎  
地 四番より土佐坊五番より 實平 實平は六  
 番より 遠平 同き遠平 實平 艦板より  
義實 義實あり 地上 此人より君のため。此  
 人より君のため。龍門原上の土よ屍 打切

スムもも。惜しむ命ある。  
 孰れを薬み出さし。かゝもの實平  
 思ひかね。赤面したるありあり赤面  
 したるありあり 頼朝 頼朝の  
 ことよ實平。

實平 何ぞ摩訶般若を急ぐや。おろし入  
 畏つて。いづよ固崎殿の由。急いで  
 馬舟より下つた。 義實 何と某の馬

母をいひておのれを 實平 さまへの事  
 暫らく 義實 此の供のちよも某の老體  
 ちよも程もあつて 實平 用まひなり  
 おもひ程 實平 人と思ひていふも  
 承ういふも其儀もあつていふも  
 ちよも 實平 へ 實平 の儀  
 おもひ程 實平 艦板にさかしていふ程よ

陸の別な 義實 中  
 命つ持ちたる 實平 者や舟に  
 ありたる 實平 思議あり  
 事を承う 實平 入らば  
 よう 實平 命つ持ち  
 ちよも 實平 持ち  
 某 實平 持ち

とせ。ちか<sup>美康</sup>の命をば我<sup>實平</sup>が若<sup>一</sup>きよきよ  
ちか<sup>美康</sup>の命をば我<sup>實平</sup>が若<sup>一</sup>きよきよ

其事<sup>美康</sup>のい<sup>一</sup>のよ<sup>一</sup>石橋山の合戦よ。  
子<sup>一</sup>まてい<sup>一</sup>佐那田の餘<sup>一</sup>義忠<sup>一</sup>の副將  
軍を賜<sup>一</sup>たり。股野と組んで討たれぬ。  
か<sup>一</sup>親子<sup>一</sup>の體<sup>一</sup>の命<sup>一</sup>をば我<sup>一</sup>。  
見<sup>一</sup>由<sup>一</sup>か<sup>一</sup>土肥<sup>一</sup>殿<sup>一</sup>の命<sup>一</sup>をば我<sup>一</sup>親子

「貴<sup>一</sup>殿よ。あた<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>は<sup>一</sup>忠<sup>一</sup>分<sup>一</sup>残<sup>一</sup>つて遠平  
を<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>り<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>り。遠平を<sup>一</sup>殘<sup>一</sup>して忠<sup>一</sup>分<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>り。  
親<sup>一</sup>子の<sup>一</sup>ち<sup>一</sup>ち<sup>一</sup>入<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>は<sup>一</sup>い<sup>一</sup>た<sup>一</sup>よ<sup>一</sup>。  
て<sup>一</sup>の<sup>一</sup>餘<sup>一</sup>の<sup>一</sup>首<sup>一</sup>理<sup>一</sup>の<sup>一</sup>物<sup>一</sup>の<sup>一</sup>た<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>ひ<sup>一</sup>ぞ。  
い<sup>一</sup>の<sup>一</sup>遠<sup>一</sup>平。君<sup>一</sup>の<sup>一</sup>後<sup>一</sup>を<sup>一</sup>た<sup>一</sup>て<sup>一</sup>。  
急<sup>一</sup>に<sup>一</sup>舟<sup>一</sup>船<sup>一</sup>の<sup>一</sup>入<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>は<sup>一</sup>い<sup>一</sup>た<sup>一</sup>よ<sup>一</sup>。  
舟<sup>一</sup>の<sup>一</sup>入<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>は<sup>一</sup>い<sup>一</sup>た<sup>一</sup>よ<sup>一</sup>。





一。あつたまも。今遠平が親と子の  
 別よあつた。と。皆後をぞ流しける。  
 遠平の早舟を暫しとたよも  
 ぞつめくも跡を見送つた。おめがし  
 ば。遠平の浦の波をさる別れゆく有  
 様を。餘の入りとて。憐み  
 あつた。船のちよ。實平のひた

一。まらよ。勇氣を見え。とて。あつた  
 あり。みあつた。と。強くも行く跡よ。  
 敵大勢見えたり。も。や遠平の討た  
 り。とて。頼朝もあつた。又陸を見給へば  
 さまら。づ。恩愛の契も唯今に限  
 り。と。思ひ。實平の。磯。身よ。と。わ。び。人。知  
 り。と。あ。つ。た。の。あ。つ。た。と。遠平と

一處に討たせしめしめりて飛び  
立ちあがりて思ひの別ぞ哀ありける  
別ぞ哀ありける

うき月の西の空行くはぬ舟路  
かな 仲あはれ音もも 國の  
聲もと怒りや かな見え

たるが遠く舟もいかにてはるかな

舟を漕がせし 舟を漕がせし 田舎のし 田舎 かな かな

申はあはれよ兵船一艘見えし

とあなたよう詞をかきかきし

然るぞ 美實 かな 實平 かな かな 船の誰が

召されたる船もいぞ 美盛 あれも

そあなたの船影を怪しく思ひはら

あり。そも誰人の船やら 實平 かな かな

七騎落

土肥の次郎實平が乗つたる船はよ  
義盛 何と土肥殿の舟船と云や 實平 あらう  
 の事。さて其舟船に誰が召された  
義盛 舟船と云ぞ 義盛 いかんぞ和田のふ  
實平 太郎義盛が乗つたる船と云 實平 たら  
義盛 和田殿の舟船と云ぞ 義盛 あらう  
 の事。由し申し置かば、如く舟身はよ

素らく為さしむまが、素くして。さて君ら  
實平 その舟船も、座るが 實平 和田の内  
 申し合せたる事の内、唯今素つたる  
 たら、あらう。まづたごあつて、ふを、見ら  
實平 せよ。まが、い。まよ、和田殿へ申し、いか  
 まぎの舟、素くめ、た。ま。ら。あ。ら。う。  
 面目も、な。れ。ま。の。と。れ。の。の。暮。は。い



よりの我が世を自ら成らむ。一。其の如く  
れ船の如く。一。其の如く。一。其の如く。  
其の如く。一。其の如く。一。其の如く。  
言語首断の如く。一。其の如く。一。其の如く。  
身方をいかに。一。其の如く。一。其の如く。  
頼朝の如く。一。其の如く。一。其の如く。  
あつちの如く。一。其の如く。一。其の如く。

腰の如く。一。其の如く。一。其の如く。  
君の如く。一。其の如く。一。其の如く。  
其の如く。一。其の如く。一。其の如く。  
其の如く。一。其の如く。一。其の如く。  
其の如く。一。其の如く。一。其の如く。  
其の如く。一。其の如く。一。其の如く。  
其の如く。一。其の如く。一。其の如く。

其の如く。一。其の如く。一。其の如く。

善盛

由<sup>レ</sup>申<sup>ス</sup>。其<sup>レ</sup>由<sup>レ</sup>申<sup>ス</sup>。今<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>安堵<sup>ハ</sup>候<sup>レ</sup>テ

實平

申<sup>ス</sup>。今<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>安堵<sup>ハ</sup>候<sup>レ</sup>テ

善盛

我<sup>レ</sup>が君<sup>ヲ</sup>也<sup>ノ</sup>見<sup>テ</sup>奉<sup>リ</sup>。今<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>安堵<sup>ハ</sup>候<sup>レ</sup>テ

實平

申<sup>ス</sup>。今<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>安堵<sup>ハ</sup>候<sup>レ</sup>テ

善盛

申<sup>ス</sup>。今<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>安堵<sup>ハ</sup>候<sup>レ</sup>テ

實平

申<sup>ス</sup>。今<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>安堵<sup>ハ</sup>候<sup>レ</sup>テ

善盛

申<sup>ス</sup>。今<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>安堵<sup>ハ</sup>候<sup>レ</sup>テ

實平

申<sup>ス</sup>。今<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>安堵<sup>ハ</sup>候<sup>レ</sup>テ

善盛

申<sup>ス</sup>。今<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>安堵<sup>ハ</sup>候<sup>レ</sup>テ

申<sup>ス</sup>。今<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>安堵<sup>ハ</sup>候<sup>レ</sup>テ

申<sup>ス</sup>。今<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>安堵<sup>ハ</sup>候<sup>レ</sup>テ

申<sup>ス</sup>。今<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>安堵<sup>ハ</sup>候<sup>レ</sup>テ

申<sup>ス</sup>。今<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>安堵<sup>ハ</sup>候<sup>レ</sup>テ

申<sup>ス</sup>。今<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>安堵<sup>ハ</sup>候<sup>レ</sup>テ

申<sup>ス</sup>。今<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>安堵<sup>ハ</sup>候<sup>レ</sup>テ

覺たきも抱かかひかほはま居またり。たらどいくば。  
たんん入り仙せん家かより一い身しんの半はん日じつの程ほどより立たち  
 出でたり。七しち世せいの孫そんよりあらむ事ことの壁かきも今いまよ  
らはなり。知らしれたり。壁かきも今いまよ知らしれたり。

實平

一いと一い車くるまを引ひくはなり。

一いと一い車くるまを引ひくはなり。

一いと一い車くるまを引ひくはなり。

美盛

一いと一い車くるまを引ひくはなり。

實平

一いと一い車くるまを引ひくはなり。

一いと一い車くるまを引ひくはなり。

一いと一い車くるまを引ひくはなり。

一いと一い車くるまを引ひくはなり。

一いと一い車くるまを引ひくはなり。

一いと一い車くるまを引ひくはなり。

一いと一い車くるまを引ひくはなり。

年あつ。津の馬つらう飛んで下つ。まて  
捕の體よもつかし。船底よ乗せ申し。  
もしまで伴ひ送つたう。あしほらう上肥  
殿よ義盛の忠の者よして。あつ。  
あつがたを捕へし。あつがたを唯今の馬物  
語を聞かして。あつがたを。あつがたを。  
いこのよ。あつがたを。あつがたを。

あつがた

あつがた。あつがた。あつがた。  
あつがた。あつがた。あつがた。  
あつがた。あつがた。あつがた。  
あつがた。あつがた。あつがた。  
あつがた。あつがた。あつがた。  
あつがた。あつがた。あつがた。  
あつがた。あつがた。あつがた。  
あつがた。あつがた。あつがた。  
あつがた。あつがた。あつがた。  
あつがた。あつがた。あつがた。

仕舞

キリ上ニ  
打上  
カク

かくて時日を廻らさむ。かくて時日を  
 廻らさむ。國々の兵馳せ来む程  
 なく御勢が二十萬騎あり給ひつ。  
 たまごころよは法め給へ。此君の代の  
 めでたまは。めも實平ぶ。忠勤  
 の道よ。實平ぶ。忠勤の道よ  
 といふ家のまへに。

弱法師

解題

高安の里の少年俊徳丸家を連はれて流浪する間に盲目となり、天王寺の乞食弱法師の群に入  
 り居たらが、偶彼の二世安徳を祈らんとて、施行の爲に未だ父と邂逅することを得たり。有  
 りて二百十番流用録及び能本作者注文に世所珍の作とあり。看聞日記に永享四年三月仙洞所にて上演  
 せられたり。其事あり。古く侍けりたる諸法本を此ぶらに、通後を、流言又は「近年に俊徳を、流徳に作れ  
 るもあり。流徳にありて言ひ更へたるが、又此曲より生れたり」と見ゆる後作に、天王寺物狂といふ  
 廢曲あり。俊徳丸の本が家に在りし頃、其稚兒舞の姿の美しきを思ひて、文を交して行く本を契り  
 し。和泉の女、信母に逢はれて家を去りし後、俊徳を慕ふ餘り、心狂ひて天王寺に迷ひ入り、その盲目の乞食  
 と化れりて廻り逢ひて、殊背の契をなすことを得たり。

能之變式

盲目之舞といふ形にありては、いふ流れたりの後、クサシクセを省きて、直にワ  
 キの詞、あら不思議や、とくに後、以下文句に出入無し。

謡の方梗概

本篇は其趣の上より見れば、盲目を悲む述懐、日想観より狂ひまて、親子の再會と  
 これを三段に大別することを得れば、それぐの味は、これを能く表現することを得  
 通じて流離憔悴せる盲目の少年の心を以て、位を重々しからしめ、すして痛能く悲痛の趣を  
 持たしむべし。心持に過ぎて老いこみたる氣を、に陥らぬやう注意を要す。此心得にて

シテ

一聲を火し押へてのやかに、然も餘り低からず流し出し、二の句は稍張りを持たせ、さうりめに取  
 サシは運びの鈍らぬやうや、すうりと流し出し、中音になりては、いふクド平めきて、段しげに流し、述  
 ぶべく、下歌にて更へてゆらりと、上歌は流し、好く、流し、なからぬやう、靜に流し、石の高居、こた  
 れや、心を大事に扱ふ。此下歌、上歌は能の時には、地に流し、か、普通通り、けたあり、たき、御利益、以  
 下の幸との間、合は、餘り流し、なからぬやう、氣を、なす、ち、悲、悲、を、喜、ふ、心、に、な、す、通、に、さ、ら、り、め、か、宜、し、い、や  
 花の香の聞え、い、より、は、興、を、催、したる、能、にて、掛、合、順、次、に、接、め、て、承、け、渡、す、次、の、サ、シ、は、流、れ、か、た、ク、セ、の、上  
 端は、確り、めに、火、し、引、き、ま、て、流、し、け、た、く、日、想、観、の、い、ま、の、詞、は、氣、を、一、新、し、て、稍、す、ら、く、と、心、あ、て、な  
 る、さ、ら、く、と、殊、勝、し、る、中、に、も、さ、ら、り、と、扱、い、渡、す、問、答、は、角、主、た、ぬ、お、う、稍、引、き、ま、て、隙、さ、す、承、け、應、へ、東、門、に  
 向、ふ、さ、ら、く、と、一、聲、の、調、子、に、て、朗、ら、か、た、太、く、流、し、あ、ら、面、白、や、以下は、興、高、まり、来、つ、て、其、身、の、盲、目、な、ら、な  
 も、悲、し、み、を、全、く、打、ち、忘、る、結、な、れ、ば、須、次、引、き、ま、て、字、き、や、か、た、扱、い、これ、より、先、風、露、月、の、境、あ、ら、へ、し、  
 口力は別に、出で、稍、暢、び、や、か、た、美、しく、扱、い、お、く、見、る、ぞ、と、い、は、出、を、前、へ、カ、ケ、て、大、き、く、氣、を、束、せ、地、と、の

弱法師

辨合は轉して用前の致景を想見する心に設々と寄する心は流ふ。ロンギは股めて心願、より再び前者の悲痛に及びたる様に、素直に出で、その通復は以下項次調子を流す。この是等かとして、氣を力けて運ぶ  
**ワキ** 徳下で徳使にかましくとあるべし。あら不思議やは、橋下に取つて出で、以下數句獨言つ慈心に  
 おうに **地** 初の上歌「花をさへ」はさうりと出で、難波の海を横もしきにて聊か復め、ついでにやしの  
 言ふ。 **地** かりを靜に、趣あるやうに流し起し、見も心ちの遠く、初に位に戻す。クリはすつきりと火し  
 引き立て、サシはさうりと流ふ。クセは確りの心で、出離のしり、火く運みをつけ、上端後は、引引き立  
 て、振ふたれども、難波の寺の鐘の聲と、聴く心は、心持する所も、あれは、大切に流ふが宜し。入日の影  
 も、さうはシテを承けて、晴れくさうらやに運び、今、さうは、なな、十分は、鎮む。ロンギは、全く別に火し  
 け、目想観を、は、もう、項次に、調子つきて、展望を、流し、満月青山は、と大きく、心にありしと、稍運ぶ、シ  
 テとの辨合は、氣を、受へて、尋常に出で、次第に、火し、つかり、かた、こなたに、運を、有ら、し、音目の、悲し  
 さは、さう、氣を、かけて、整く、さうらや、に、運び、今、さうは、なな、十分は、鎮む。ロンギは、全く別に火し  
 物靜に出で、句毎、悠や、したシテの、氣を、承けて、流し、親が、がら、以下、さうら、め、何、を、かつ、む、と、火く、位  
 を、掃、の、鐘、の、聲、も、火く、内、取り、以下、儘、さうら、く、止、めの、返、し、を、掃、の、め、納、む。

**辭解** 高安の里 河内國中河内郡、今の北中南、高安村。暮暮 追ひ失ひ 追ひ 二世

**安樂** 現世と來世 天王寺 用明天皇の時、聖德太子物部守屋と戦ひ、捨り、持國、増長、廣目

多聞の四天王に祈りて、大捷を得、捨り、推古天皇元年、今の地、即ち、大坂市の南、都連、阪上、に遷されしものなり。

**一七日** 會は、最も、春、活、多き、もの、なれば、此に、失ひ、たる、子の、二世、安樂、の、為、施、行、を、せ、り、た、り、な、り。

**行** 布施の行法、人に物を施すをいふ。持しては、實天、を、た、施、出で入の云、音目となりて、晝夜

を得ぬ、思ひ、き、境、過、を、難波の海の云、難波の海、の、底、の、知、れ、ぬ、を、深、き、物、思、ひ、に、云、ひ、か、く、難、波、は、

述ぶ、或は、引、放、た、や、難波の海、の、底、の、知、れ、ぬ、を、深、き、物、思、ひ、に、云、ひ、か、く、難、波、は、

引放たや、鴛鴦の食衣の下に、鴛鴦(せうじう)は、雄、雌、常、に、連、れ、ま、ち、て、住、む、と、い、は、さ、う、り、こ、れ、を、さ、う、な、女

會散に譬して鴛鴦の家、比目魚の枕といふ。鴛鴦は、共寝しつゝ、も立ち離れ、時には如何に悲しからんと思ひ  
 類の比目魚は比ぶる枕にも波に隔てらるゝことを憂へざることをいふ。こゝには親子の薄縁なる  
 にいふ句の據るところ、明ならず。此文、心あり類、分別の心あり、有為の身、因縁を離れ、愛  
 結に用ひられたり。食衣は夜具。心あり類、分別の心あり、有為の身、因縁を離れ、愛  
 き年月云、心ありとも思はれぬ。鴛鴦、比目にも猶愛ありといふた、われは、さうて、心ありに、因縁所  
 れといふは何れも水に流れては、今集束の故、流れては、吉野の山の中に、流つる吉野の川のよし  
 縁あらうめたるなり。流れては、今集束の故、流れては、吉野の山の中に、流つる吉野の川のよし  
 れて、流つる川の如く、物の因果は如何にも、難け、前世、佛法に、想像せ、生をもかへぬ、今主  
 れは、世のまづ、身を、任せ、と思ひ、捨、て、た、ら、意、前、世、佛法に、想像せ、生をもかへぬ、今主  
 後世と説かれたら、其、中有の道、中陰ともいふ。安樂せ、心の闇、闇思、を、人、間の、心の、迷、音  
 今世の身を、更、す、た、ら、其、中有の道、中陰ともいふ。安樂せ、心の闇、闇思、を、人、間の、心の、迷、音  
 は、あり、た、ら、な、ら、彼、の、一、行、の、云、源、平、盛、衰、記、平、家、物、持、等、に、見、え、た、ら、一、行、阿、闍、梨、の、故、事、を、引、一  
 るべしと、なり。彼、の、一、行、の、云、源、平、盛、衰、記、平、家、物、持、等、に、見、え、た、ら、一、行、阿、闍、梨、の、故、事、を、引、一  
 の、慈、に、觸、れ、果、羅、の、國、へ、流、れ、た、り、彼、の、國、へ、入、ら、ん、三、の、道、あり、一、は、林、地、通、と、て、佛、尊、の、道、一、は、出、世、通、と、て、佛  
 雜人の通ふ通、一は、阿、闍、梨、と、い、ひ、七、日、七、夜、の、同、光、を、見、ざ、る、周、通、に、て、罪、人、を、流、す、通、なり、一、行、こ、の、周、通、と、て、佛  
 へ、通、じ、た、ら、ん、天、通、無、量、を、函、み、て、九、曜、形、を、現、下、て、闇、を、照、し、捨、り、か、ば、一、行、指、を、噛、み、切、つ、て、其、形、を  
 血、を、以、て、袖、に、寫、し、彼、の、國、に、到、れ、り、後、救、され、て、歸、り、し、が、こ、れ、さ、う、九、曜、受、陀、羅、は、私、さ、れ、り、と、な、り、こ、れ  
 は、も、と、梵、天、大、羅、九、曜、と、い、ふ、經、書、に、附、會、し、た、ら、説、話、を、た、れ、ど、も、こ、れ、は、事、實、と、し、て、引、用、せ、り、果、羅、(或  
 は、大、羅)は、假、作、の、國、名、九、曜、受、陀、羅、とは、日、月、大、水、木、金、土、の、七、曜、及、び、餘、星、(推、雜、慧、星、計、部)の、九、曜、と、其  
 所、屬、の、神、像、と、を、寫、末、世、釋、迦、入、滅、後、正、法、時、五、百、年、像、法、時、一、千、年、を、經、過、し、て、教、法、は、存、在、す、れ、ど、佛、行  
 せ、ら、佛、門、の、圖、畫、末、世、釋、迦、入、滅、後、正、法、時、五、百、年、像、法、時、一、千、年、を、經、過、し、て、教、法、は、存、在、す、れ、ど、佛、行  
 末、法、の、世、名、に、た、ら、な、き、佛、法、最、初、の、云、流、布、せ、ら、最、初、の、寺、を、り、石、の、鳥、居、天、王、寺、の、主、坊  
 に、當、る、名、に、た、ら、な、き、佛、法、最、初、の、云、流、布、せ、ら、最、初、の、寺、を、り、石、の、鳥、居、天、王、寺、の、主、坊  
 忍、性、が、永、仁、二、年、(大、正、七、年、)より、百、二、十、四、年、前)に、從、來、の、衛、門、の、石、の、鳥、居、天、王、寺、の、主、坊  
 せ、ら、を、改、め、て、石、を、以、て、建、造、せ、り、もの、こ、の、こ、と、元、き、釋、迦、に、出、つ、ま、さ、ら、な、き、陰、歷、二、月、時  
 正、の、日、彼、岸、の、中、日、天、王、寺、の、西、門、は、云、く、極、樂、の、東、門、に、對、す、こ、の、こ、と、以、て、彼、岸、の、中、日、に、こ、れ、に、集、り、後  
 日、を、辨、し、往、生、を、願、ふ、こ、と、や、が、て、彼、岸、會、の、起、源、を、か、さ、し、た、る、もの、なり、此、日、春、活、多、く、難

踏を極むること。日を得て。よりから空を晴れ長用なる日なり。普き貴賤の場

貴賤の普く群。利益。衆を利する意。法界無邊の云。一切衆生を心の諸法即ち法界の廣大に

集せら場所。弱法師。弱法師の意。弱法師は假字なり。弱法師は假字なり。弱法師は假字なり。

踵をついで。踵は足のかかとなり。弱法師。弱法師の意。弱法師は假字なり。弱法師は假字なり。

師といふを約めて。前後の人相接する意。弱法師。弱法師の意。弱法師は假字なり。弱法師は假字なり。

り。こゝにいかさま例のしと冠せらるを以て見れば天王寺には僧形をなすたる盲目の乞食ども到來の

人に物を乞ふ風俗ありて一般にこれを弱法師と号びたる。弱法師の意。弱法師は假字なり。弱法師は假字なり。

もの見ゆ此後徳丸一人につきてのあざ名には非るべし。足弱車。盲人の足はかかしく歩み得

ぬを足弱車に見立て足弱車の片輪といひ。よらめを。足弱車の亂れてたし。心ありげ。平

かけて不具者の意のかたはに法を轉す。よらめを。足弱車の亂れてたし。心ありげ。平

なる乞食者の如くならずみやひ。花の香の云。花の香がするといふを香を利くといふ。時代法語なり。

たる心にせしめありさうなりと云。花の香の云。花の香がするといふを香を利くといふ。時代法語なり。

木の花。梅の畧名。王仁の歌。難波津にさくやこの花冬こもり今を春べと笑くや木の花。う

たてやな。意の感歎詞。難波津。難波といふに同じ。船の着く津なり。梅の字を添ふ

てはちはず。梅の花と。梅花を折つて。和漢朗詠集に「折梅花而挿頭、二月之雪落衣」と

仰せあるべきことなり。梅花を折つて。和漢朗詠集に「折梅花而挿頭、二月之雪落衣」と

ざす風流をせられども。二月の雪は即ち梅の花なり。花も。花も即ち修行の

に落つとなり。二月の雪は即ち梅の花なり。花も。花も即ち修行の

ふ意の。草木國土。有情非情成佛迴向文に「佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛」佛

時代語。草木國土。有情非情成佛迴向文に「佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛」佛

すと云い應へ漏れすと施。袖を廣げて。修行を受くる仕方。梅衣。龍衣の色目の名なるを梅

行に連る意に詞を轉す。袖を廣げて。修行を受くる仕方。梅衣。龍衣の色目の名なるを梅

梅さき香る春。何はの事か。昔、難波の遊女宮本といふ女、書寫山の聖に布施を奉りし

にいひ及ぶ。何はの事か。昔、難波の遊女宮本といふ女、書寫山の聖に布施を奉りし

みたる敷に河津の國のなにはの事か法がらぬ遊び戯れまてこそ聞けし（後拾遺集）とあり。遊び戯

りし事まで何事か佛法に漏るる所なきことと意を、難波と河の事と云ひ掛けて作れる歌なり。

こゝには其心と詞。誓ひの網。佛の衆を救ふ誓ひ。盲龜。佛説に大海に盲龜ありて偶々

とを引きて照る。誓ひの網。佛の衆を救ふ誓ひ。盲龜。佛説に大海に盲龜ありて偶々

佛の教に施ふことの有り難きを述べたる詞あり。海と佛教と盲龜との像。佛日西天の云。釋

にて出し、遠い難き時に達し得たらん心をも合みて「盲龜のあれら」といふ。佛日西天の云。釋

の入滅を日の西空に隠れたるに擬す。佛日は佛を日輪に。慈尊。釋迦の滅後、平徳七十年、年

奔へたる通用法。西天は西方天竺の意にて印度のこと。三會。彌勒菩薩が一切の衆生を濟度す

集めて人天の化益をなすべしと誓言せられたる彌勒菩薩。三會。彌勒菩薩が一切の衆生を濟度す

此菩薩の世に出づる時も未だ遠に遠ければ云々の意。中間。釋迦と彌勒との中間の世。のばへまじ

於ける三度の法會佛の入滅を日。中間。釋迦と彌勒との中間の世。のばへまじ

何にせよてか心を安んぜんといふ。のばへまじ。以下、天王寺の。上官太子。皇居の





板の音を借りい 行きさあいの 新古今集に佳末の明神の舟歌と傳へたる歌の句「行合の足  
たつらにと後く。難波にの 俊徳丸 通俊の子、あらぬ方 の方。何をかつても 何と色みか  
もとは 難波にの 俊徳丸 假作の名。あらぬ方 の方。何をかつても 何と色みか  
るには及ばずとの意。何に 夜まきこれに 鐘の聲の夜にまきこれて御書く意より夜の  
韻を重なり難波寺と改ぐ。

四  
番  
目  
畧  
三  
番

弱法師

二  
月

ワシテ 俊徳丸  
高安通俊

早  
行

あやうなる者。河内<sup>カワチ</sup>の國高安の里よ。  
左衛門<sup>サエモン</sup>の尉<sup>ジウ</sup>通俊<sup>トウジュン</sup>と申き者よ。ては。  
かしの某<sup>ミヤ</sup>子<sup>コ</sup>をい入<sup>イ</sup>持<sup>チ</sup>ちてらむ。かた入<sup>イ</sup>  
の讓<sup>ヤク</sup>よらむ。よらむ。暮<sup>ク</sup>よらむ。どりまらして。  
餘<sup>ヨリ</sup>うよ。不<sup>フ</sup>便<sup>ベン</sup>なる程<sup>ハジ</sup>よ。こせ安樂<sup>アンラク</sup>のため  
文<sup>フミ</sup>よ。まよ。て。十七<sup>ナナ</sup>日<sup>ニチ</sup>施行<sup>シヨウギョウ</sup>を。い。ま。ら。し。今<sup>イマ</sup>日<sup>ニチ</sup>

施行せしむ

弱法師

も施行をいふもあやと存ら

狂言シカド

出入シテヤイ上の月ヨウクを見かては明暮シカドの夜シカドの

境シカドをぞ知らぬシカド難波シカドの海シカドの底シカドひ

なく染シカドれおもひを人シカドや知シカドるシカドそれ

鴛鴦シカドの念シカドの下シカドもるシカドさちきる思シカドを

悲シカド女シカドは目シカドの杖シカドの上シカドもは波シカドを隔シカドつる

愁シカドあつシカドるシカド顔シカドあるシカド人シカド同シカド有シカド

為シカドの身シカドとあつシカドるシカド夏シカドの年シカド月シカドの流シカドれ

てゐシカド妹シカド背シカド中のシカド中シカドも落シカドつるシカド吉シカド野シカドの

三シカドのシカド一シカドやシカド中シカドのシカド思シカドひシカドはシカドてシカドぬシカドはシカドあシカド。

あシカドかシカドもシカド一シカドやシカド中シカドのシカド難シカドをシカドしシカド厭シカドひシカドけシカドん。

今シカド又シカド入シカドのシカド難シカドをシカドしシカド不シカド孝シカドのシカド罪シカドよ

決シカドひシカド子シカドをシカドぬシカドのシカド思シカドひシカドはシカドあシカドつシカド。目シカド目シカド。

あシカドかシカドもシカド一シカドやシカド中シカドのシカド思シカドひシカドはシカドあシカドつシカド。

中<sup>ナカ</sup>有<sup>ア</sup>の道<sup>ミチ</sup>よ。迷<sup>マヨ</sup>ひあり  
 心<sup>ココロ</sup>の闇<sup>ヤミ</sup>ありぬべし  
 かの一行<sup>イツギョウ</sup>の果<sup>クハ</sup>羅<sup>ラ</sup>の旅<sup>リョ</sup>かの一<sup>イツ</sup>行<sup>ギョウ</sup>の果<sup>クハ</sup>  
 羅<sup>ラ</sup>の旅<sup>リョ</sup>。闇<sup>ヤミ</sup>穴<sup>アナ</sup>道<sup>ミチ</sup>の卷<sup>マク</sup>よも。九<sup>ク</sup>曜<sup>ヨウ</sup>の曼<sup>マン</sup>  
 荼<sup>タ</sup>羅<sup>ラ</sup>の光<sup>クワ</sup>明<sup>メイ</sup>赫<sup>カク</sup>炎<sup>エン</sup>とて行<sup>ユク</sup>く末<sup>マツ</sup>を  
 照<sup>テウ</sup>し給<sup>タマフ</sup>ひつらもあやふも末<sup>マツ</sup>せしむ  
 あらら。たむらあよあよ此<sup>ココ</sup>寺<sup>ジ</sup>の佛<sup>ブツ</sup>法<sup>ポフ</sup>

最<sup>サイ</sup>初<sup>ショ</sup>の天<sup>テン</sup>王<sup>オウ</sup>尊<sup>ソン</sup>の石<sup>イシ</sup>の鳥<sup>トリ</sup>居<sup>イ</sup>こいあれや。  
 立ち寄<sup>トヂヨリ</sup>りて揮<sup>ヒ</sup>まこころを心<sup>ココロ</sup>を寄<sup>ヨシ</sup>り  
 て揮<sup>ヒ</sup>まこころを心<sup>ココロ</sup>を寄<sup>ヨシ</sup>りて揮<sup>ヒ</sup>まこころを心<sup>ココロ</sup>を寄<sup>ヨシ</sup>り  
 まいよ時<sup>トキ</sup>も長<sup>ナガ</sup>因<sup>イン</sup>ある日<sup>ヒ</sup>を得<sup>エ</sup>てあま  
 むか貴<sup>キ</sup>賤<sup>セン</sup>の場<sup>バ</sup>よ。施<sup>セ</sup>行<sup>ギョウ</sup>をあてまらめ  
 けり。つよあつがたまは利<sup>リ</sup>益<sup>イキ</sup>法<sup>ポフ</sup>  
 界<sup>カイ</sup>無<sup>ム</sup>邊<sup>ベン</sup>の馬<sup>ウマ</sup>し意<sup>イ</sup>悲<sup>ヒ</sup>ごと。踵<sup>ケヒ</sup>を接<sup>ツク</sup>いで

羣集クラムの心ココロ

わ。ん。ご。の。せ。で。た。る。を。

ち。い。ん。の。お。例。の。弱法師ヨクホウシよ。な。

又。あ。ら。ま。を。つ。けて。皆。弱法師ヨクホウシと

行。せ。あ。ら。ま。や。も。此。身。の。盲。目。の。

足。弱。車。の。片。輪。あ。ら。ま。の。お。お。お。

け。弱。法師ヨクホウシと。あ。ら。ま。の。あ。ら。ま。の。

あ。ら。ま。の。あ。ら。ま。の。あ。ら。ま。の。

おりのま

でも。い。つ。り。の。あ。ら。ま。の。あ。ら。ま。の。

施行シヨウギを。受。け。給。入。の。あ。ら。ま。の。あ。ら。ま。の。

や。花。の。香。の。間。ま。の。あ。ら。ま。の。あ。ら。ま。の。

り。方。よ。あ。ら。ま。の。あ。ら。ま。の。あ。ら。ま。の。

の。梅。の。花。が。弱法師ヨクホウシが。袖。よ。散。り。あ。ら。ま。の。

ぞ。と。よ。夏ナツた。て。や。お。難。波。津。の。春。

あ。ら。ま。の。唯。本。の。花。と。い。ふ。行。せ。あ。ら。ま。の。

カニト

今カニトの春邊もあらざどや梅ウメ花を折  
 りて頭カミに挿カはるまはるも二月ニツキの  
 雪ユキの衣イよ落フつあら面白オモシロの花ハナのよほひ  
 やまハナ ウツカニト ウツカニト ウツカニト ウツカニト  
 花ハナもあつらシテ施行シヨウギぞとよシテあつシテく

の事コト草クサ本ホ國クニ土ツチ。悉シツ皆ミナは法ホウも施行シヨウギを  
 行ウツカニト ウツカニト ウツカニト ウツカニト  
 皆ミナ成ナリ佛ブツのノ大ダイ慈ジ悲ヒよシテ シテ シテ シテ  
 洩ユクれ

小談

とシテ施行シヨウギよシテ連ツラりて ウツカニト ウツカニト  
 袖スリーブをシテ廣ヒロげて ウツカニト ウツカニト ウツカニト ウツカニト  
 のシテしシテらシテくシテはシテ受ウケくるシテ施行シヨウギのシテしシテらシテくシテよシテ  
 白シロひシテ来キよシテけシテりシテ梅ウメ衣イのシテ春ハルをシテあシテれシテやシテあシテよシテ  
 此コノのシテ事コトがシテ法ホウあシテらシテぬシテ遊アソびシテ戯シれシテ舞マひシテ  
 謡ウタのシテ細ホソいシテのシテ網アミのシテ油アブのシテまシテのシテまシテのシテまシテのシテまシテのシテまシテ  
 海ウミぞシテ頼タノもシテ一ヒトさシテびシテのシテまシテのシテまシテのシテまシテのシテまシテのシテまシテ  
 身ミ法ホウ師シ

春の長閑けさの難波の法よもも波  
 れ難波のはよもも波れど  
 佛日西天の雲は隠れ慈尊の出世  
 遙よ三會の曉未だあり然る  
 よ此中向ふ終として何れを延びて入  
 まるしんよよひしてつとまをたもつ國家

●サシクを獨吟

を改め萬民を教へ佛法流布のせと  
 あして普く惠を弘め給ふ然れが  
 當寺を創建立あつて始めて僧  
 尼の姿を顯し四天王寺と名づけ  
 給ふ金堂の法本尊の如意輪の  
 佛像救世觀音をも由きてか太子  
 の産前生震旦國の思禪師とて

寫法師

渡らせ給よけりあり。出離の佛像よ  
 應じり。今日域に至るまで。佛法  
 最初の法本尊とあらせ給よけり  
 威光の眞あるもや末世相應の  
 法甚然り。當寺の佛肉の法作の  
 品も。赤梅檀の靈本として。塔婆の  
 金寶よし。たるまで。圓浮檀金ある

とあや 萬代よ。まある。地井の水  
 までも 水上清き。西天の無熱  
 池の池水を受けり。流る。一  
 代。までも五濁の人間を導きて  
 濟度の舟も。寧も。ある。難波の  
 寺の鐘の聲。異浦よ。郷音を。来て  
 普あらし。あひ満潮の。お。照る。海山も

皆成佛の樂あり。かゝる田の儀也。  
此の樂あり。一。此の樂あり。一。此の樂あり。一。  
此の樂あり。一。此の樂あり。一。此の樂あり。一。  
此の樂あり。一。此の樂あり。一。此の樂あり。一。  
此の樂あり。一。此の樂あり。一。此の樂あり。一。  
此の樂あり。一。此の樂あり。一。此の樂あり。一。

を挿みたり。一。此の樂あり。一。此の樂あり。一。  
時節あり。一。此の樂あり。一。此の樂あり。一。  
此の樂あり。一。此の樂あり。一。此の樂あり。一。  
挿み南無阿彌陀佛。一。此の樂あり。一。  
此の樂あり。一。此の樂あり。一。此の樂あり。一。  
此の樂あり。一。此の樂あり。一。此の樂あり。一。  
此の樂あり。一。此の樂あり。一。此の樂あり。一。  
此の樂あり。一。此の樂あり。一。此の樂あり。一。



げよむとて難波の寺の西にせむづる  
 石の鳥居のまにまに  
 門をせむづる  
 東の門よ  
 難波の西の海  
 の影も舞ふ  
 常よ見馴れし  
 蜀法師が

●仕舞獨吟

も難波江よ  
 夜の清宵  
 任吉の松の隙より  
 月落ちたる  
 今入日や  
 ありて  
 蜀法師

明石。紀の海までも見えたり見え  
 たり。満目青山ハ。いよあり。シテ  
 見さぞ。見さぞ。見さぞ。地上。難波  
 の浦の致景の敷。シテ。南ハ。そ  
 と。波の住吉の松影。地上。東の方ハ  
 時を得て。春の緑の草香山。北ハ  
 何處。難波。地上。長柄の橋の

徒よ。あなた。と。あなた。あり。く。程。盲目  
 の悲。貴賤の。人。行。あ。ひ。の。  
 轉。漂。難。波。江。の。足。も。さ。ら。よ。ろ  
 ぶ。ろ。と。げ。も。真。の。弱。法師。と。て。人。  
 笑。び。給。よ。ぞ。や。思。入。せ。恥。カ。や。あ。今。ハ  
 狂。ひ。い。ら。今。よ。ろ。つ。ら。な。ら。よ。は。や。と。  
 今。は。や。夜。も。更。け。入。も。静。ま。つ。ぬ。い。

入の果やらし。その名を名のり給  
 入<sup>甲</sup>。思<sup>上</sup>らばもや誰をれぞ我が  
 し。同<sup>ス</sup>の里あり。後徳丸<sup>切</sup>が果<sup>下</sup>あり<sup>甲</sup>。上<sup>地</sup>。喜<sup>上</sup>や  
 われし。母の<sup>上</sup>後よ。おそ<sup>下</sup>も  
 通<sup>上</sup>後。我が父のその声と聞<sup>下</sup>よ  
 りも。胸<sup>地</sup>うち騒<sup>下</sup>かむわ<sup>下</sup>り。

後徳丸<sup>切</sup>が果<sup>下</sup>あり<sup>甲</sup>。上<sup>地</sup>。喜<sup>上</sup>や  
 われし。母の<sup>上</sup>後よ。おそ<sup>下</sup>も  
 通<sup>上</sup>後。我が父のその声と聞<sup>下</sup>よ  
 りも。胸<sup>地</sup>うち騒<sup>下</sup>かむわ<sup>下</sup>り。

結上

解題

太政大臣藤原師長琵琶の奥儀を究めんとす。日本名残に須磨の月を賞せん  
とせし。村上天皇、梨壺女御の重現して琵琶の秘曲を彈す。其入唐を思ひ止まらぬ。又  
此宮より琵琶の名器獅子丸を携ち來らしめて授け給ひしことを外れり。二百十番注月録に全剛の作とあ  
り。曲名一に重象、玄上、琵琶とも書く。結上の字、曲名には清み、文句の中には隔りて讀む謎ひ癖  
なり。

謎ひ方概

前段歌に似たる趣もあれど、それよりは稍奇く、通シテ前は漁翁なれども十  
トて後急心持等多ければ、能く言ひて讀ふべし。シテ今に二位を有つ。云  
の一聲は抑へて舞に連介。サシにて少く氣を更へ、以下舞合は景色を面白くと眺むる處なれば、心  
長閑に、且つ前よりは狂を聊か直めて受け給ひ、其後の連介を猶大さやかに地に派す。ワキとの同答は  
後やかに受け給へ。見苦しくも、さうより心持を改めてツレとの舞合に入り、大雨降る事候日を唯り、  
雨の大臣とは申すとかやと丁寧に大きく、別無き思出の連介を少くさうりめに地に派す。や、何とて御  
琵琶をば云々は陳さす前へかけて出、次の詞にて、いかに能く氣を更ふ。以下さうりめに地に派す。連介を物  
靜にすうりと法ひ、さつと舞をかくつて唯りと止む。さんやの詞は懸にはつきりとあるべし。口  
ンギは格らぬやうに、いかも少く狂を取らるべく、何れ人の詞は脚が心急ぐ懸にてさうりめに派ひ、今  
は何をか云々は格らぬやうに、いかも少く狂を取らるべく、何れ人の詞は脚が心急ぐ懸にてさうりめに派ひ、今  
を度して緩やかに奥儀なうべく、抑はれは云々は一聲の調子にて唯りと大きく出で、その聖代の以下  
サシの調子に扱ひ、いかに下果のをわづつて、それより十分地みに運んで讀ふ。獅子には云々は唯りと  
東ツレ 老女なれば調子を能く高めざるが宜しけれど、獨り讀ふ處はさうりと讀ひ、  
る。ツレ 連介の處は總してシテに従ふ。のふ旅人の云々は前へかけて奇からず出づ。ツレ 師  
長 帝のツレよりも稍狂有りて是好きを旨とすれども、法の運びは徹して重くならぬやうさうりとある  
が宜し。其須磨の巻の云々は懐ひを述べたる心なれば、あまりにさうりとのみは扱はず。懸ひわびて  
以下は琵琶歌の傳なれば、全くワキ すらくくと讀み、無く讀ふ可きも、師長 地 けにや面白き云々  
取めて出で、丁寧は大事に讀ふ。ワキ 對して言ふ詞は懸懸なるを宜しとす。地 けにや面白き云々  
上腰より氣を取めて奥やかに、少く引き立て、汐波を懸を讀ひ表す。かの舞先は云々は更へて少くゆる  
やかに附け、次の上歌よりさうりと明かに附り、讀たいこともとに聞く心に扱ひ、さうりよりほか  
かつて前より運ぶ。それは浦波の云々は、村雨の降り來れる趣の處、前とは別に、づかりと出で、精

調子高に運んで流し行き、止メにて住を飾む。極度の名は前の心持を形けてさうりめに那り、寄  
り居つゝにて降め、聞く趣に流し納むべし。口ニ寄は尋常に承け後すべく、肝長思ふやう以下は音を引  
き降めて納めり。流し納む。梅が枝にこそ云々を特に注意して流し。琵琶野子云々は少く氣を兼せ  
て運び、申入前はゆつたりめに流し。後は調子先云々を十分に運んで降りと氣を兼せ。調子固く流しに  
より少く流し、幸ひは晴れやかに調子好からべし。

**注意すべき誼ひ方** 越天楽の唱歌の中、凡そかはいかにせん花に云々は、世の刃の後を一旦はに最  
して、んに移ると共に直に中に流かせ、次の「花」は下より誼ひ起す。次  
句の「帰る」も知らずとも同じ誼ひなり。

**八重の汐路** 連き海陸の意。但天和を 師長 左大臣師長の子。深元の亂、父の事に坐し、  
流承元年を改大臣に拜せられぬ。同三年平清盛の怒に觸れて再び足張國井戸田に流され、建長二年召し還され  
といへり。四年赦されて帰洛し、建長三年五十六歳にて薨す。妙音院と稱せり。音律を好み、琵琶及び  
箏に長し、その奥秘を 琵琶 此也。扱把、聲婆とも書く。天平勝安八年の東大寺獻物帳、實是十一年  
極め、こと湯言に見ゆ。 西大寺資財帳等にも其れ見えたれば、古く奈良朝の時支那より傳來せ  
るもの。 入唐 支那に渡ること。 須磨 摂津國武庫郡。古來凡光の、いつの夕云 一つの夕云、いつの日か再び降り来り  
と見ゆ。

**末に見えたる山崎** 遠く見えたる山といふを山崎にいひか。 山崎は山城國乙訓郡。今の天山崎村。 波越す袖の云 新後  
の歌、波越す袖の波のうき波云々に辭をかりて波川を呼び起す。又後醍醐天皇に同くはもろこし服もよ  
りななん知る人もなき袖の波になどと思ひよせ、朝を隔て、知る方もなきといへるにや。袖の波は九州  
より支那に渡航する要 渡川 摂津國武庫郡の西部にあつた川。今は 生田のりりくる云 まだ知ら  
ず。今の傳多なり。 生田は今の神戸市の東部三宮以南の地。 心づく 九州北野の汎海築堂に、配心且慮す  
見れば心づくの故は東にけりを引きて文を減す。生田は今の神戸市の東部三宮以南の地。 心づく  
も意を通はせて使ひ別はしたる詞。 駒の林 鹿の群なる高麗(高麗)と熟し用也  
字駒林とたか 事の由 次所のいはれ。但、皆以下の文。天和元年祿本共に、日のくられて、力づく  
けて流る。 4-は、これなる極度に立ち散る、御宿を申さばやと存はとあり。 力づくの

附くといふを突 狂き業 職業。職業をする 入日 イリとと流しは 明石 明石の浦。攝津國  
く杖に掛く。 狂き業 職業。職業をする 入日 イリとと流しは 明石 明石の浦。攝津國  
小島 九州の小さい島といふ程の意。 紀伊の小 後陸の東南部にあり。 吹上 和歌山市の西南部  
辺の古名。 佐吉 今摂津國東成郡に屬す。 復原より海を隔て 富島 富島は後陸國津和野郡にある今の富  
吹上の意。 佐吉 今摂津國東成郡に屬す。 復原より海を隔て 富島 富島は後陸國津和野郡にある今の富  
島とありて、富島と無し。加島は後陸國津和野郡の河口。今の後島村の 日比陽 摂津國河内郡。今  
一軒なり。以下摂津の名勝を列ねたるは加島を宜しとす。 富島 富島は後陸國津和野郡にある今の富  
波 今の大阪市の地。 繪馬 後陸國津和野郡東成町の東端なる産の産。 庵の如くなれば、波  
もあれど到底岸に ありといふ。 庵には、庵浦の速近の眺望は、繪馬といふ名。 今  
も直き難しとなり。 あは沖舟 後陸國津和野郡に於て所波の舟を指し、 雨こそめれ 雨にこそあり、 今  
一かへり 通。 そよよ たる心にて流り、以下、極の舟を指す。 千賀の極電 陸前國宮城郡  
古名。千賀は通に連は其名は近けれど實際は遠き更なれ 伊勢島や 伊勢の南新をも志摩の  
はとなり。下文に、極電の近きとあるも千賀に掛けたるなり。 伊勢島や 伊勢の南新をも志摩の

田子の浦 陸前國宮城郡元吉原村辺の海濱。源氏物語の歌袖ゆき、こひおとかわて、知  
りなれらあり立つ田子のみづからぞよとに、よりおたりたんの、流を去たす。 あくらははに  
古今集の在原行平の歌、あくらははにたまたまかたの意。 あぶとは流公しく思ひて、あぶと、  
へよを引く。 あくらははにたまたまかたの意。 あぶとは流公しく思ひて、あぶと、  
浦 此の浦。新古今集に、忘れしな難波の秋のよはの空黒浦にすむ月は見るともとある外、 雨の祈の  
難波に黒浦の流を流し、忘れしな難波の秋のよはの空黒浦にすむ月は見るともとある外、 雨の祈の  
御時云 雨乞の祈禱に樂を奏する例はあれど、師長が 神泉苑 京師二條城の南に遺跡あり。朱  
園集に、神泉苑正殿を乾陽園となづけ、工中、天子常に遊覽有て、風月の樂、強の遊ありけり。 延  
長式以下、神泉苑に行幸のこと見え、こゝに、後鳥羽、相模、御宿、舟遊、雨乞などあり、記録多し。 やこ

延 長 式 以下 神泉苑に行幸のこと見え、こゝに、後鳥羽、相模、御宿、舟遊、雨乞などあり、記録多し。 やこ



塵秘抄にも「上皇」の御原をいひ、調めつ、沖の波に名に負ふ。有名なるの意。琵琶の名を  
は磯に来て、鼓打てば云々。陸面には頗強勝る多し。以て聞えたる獅子丸といふ  
を獅子團亂旋。獅子は高麗樂、團亂旋は唐樂、故に獅子と唐との縁にて傳けたる  
に、いひ更ふ。獅子團亂旋。こゝには龍王の奏樂をいはんとし、樂名を出す。又これを村上とい  
ひつきたるは望月の注に「獅子團亂旋は時を知る、兩村雲や晴ぐら  
んなどと思ひよせて、村雲の村の字を行文の便としたりならんか。獅子には文殊や  
とせられたれば、前の樂名獅子を取てかく綴り、次に帝の車に乗り、師長の馬に乗るといはん處の  
序とす。

五番目

終上

八月

ツレ 藤原師長  
前シテ 老女 後シテ 龍神(露子)  
シテ 村上天皇(前ハ老翁)  
口キ 師長從者 同

ワ洋次第上  
ヨクク

ハ重の潮踏を行く舟のハ重の潮  
踏を行く舟の唐土へいつくあるらん

師長伯

持とれん太政大臣師長とら我ら事

あり 諸ものおんみまどよ響はるあか

染ましの舟よまよし唐土の唐の

舟よまよし唐土の唐の

さき道もがら名所の月さも鹿賢

せし為よ。唯今津の國須磨の浦よ序

下向よ。あはれなつらつのみ

へを都の空。また夜深きよ旅をちて。

来よ見えたる山崎も。過ぐれを跡よ

は。あつて。は。き。袖の。湊。川。は。

こも。袖の。湊。川。また。知らぬ。が。よ。も。あ。れ。ん。

生田の浦。来る月。本の向。よ。て。心。荒。  
紫の旅の道。さ。れ。も。も。こ。れ。ん。磨。土。の。  
門。出。と。思。へ。も。勇。み。あ。る。駒。の。林。を。よ。そ。  
よ。見。て。須。磨。の。浦。よ。も。著。き。よ。け。り。須。  
磨。の。浦。よ。も。し。ま。よ。け。り。須。磨。の。浦。よ。も。  
程。よ。と。い。は。や。津。の。國。須。磨。の。浦。よ。  
所。著。よ。と。い。暫。ら。く。此。處。よ。所。著。よ。と。い。



あつ。事の由をいひし事ねあらしき  
 ろていツラ上持ちあぬ。ははむ桶の苦  
 一ツラきよ。又力づく。老の杖ツラ拙ツラき業  
 を須磨の浦 眺ツラよ憂ツラかや。あらし  
 面白ツラやうらよ入ツラ目ツラ海ツラよツラ浮ツラみ須磨  
 や明ツラ石ツラの浦ツラの様ツラ塩ツラ焼ツラく海ツラ土ツラの心  
 よもツラさみ面白ツラうらツラあり 南ツラをツラ遙ツラよ

浦の敷色やヨリ  
 台ハスルモアリ

眺ツラむツラてツラいツラ海ツラもツラ續ツラけツラるツラ紀ツラのツラ路ツラのツラふツラ島ツラ  
 由良ツラのツラまツラ庭ツラのツラ早ツラ舟ツラもツラはツラはツラ風ツラのツラ吹ツラ  
 ぶツラや 葉ツラ浦ツラあツラらツラはツラ吉ツラのツラ松ツラこツラ見ツラ  
 けツラれツラ海ツラ越ツラしツラよ 富ツラ島ツラのツラ磯ツラやツラ昆ツラ陽ツラ  
 難ツラは 春ツラよツラのツラ繪ツラ島ツラとツラさツラびツラあツラらツラ  
 いツラそツラでツラのツラ筆ツラよツラもツラ及ツラぶツラあツラらツラ面白ツラの  
 浦ツラのツラ氣ツラ色ツラや 地下歌ツラ中ツラのツラ面白ツラなツラ海ツラ士ツラ

の磯屋とや淡路湾。あまた中舟の漕ぎ  
 来る。雨はあめり今一返りもは汲めや  
 人ごと上敷。そよや陸奥のそよや陸奥の  
 千賀の塩竈名のみよそて遠けれど。  
 いと運ぞし伊勢島や河漕が浦の  
 ほとけ度重ねても汲み難一田子  
 の浦のむねはくちかたのまたんあいら

方々入あいら。むねとを合入して此須  
 磨の浦のむねはくち須磨の浦のむねは  
 ち。船屋のきりし。船屋のきりし  
 借りしやむねと。むねとむねと船屋の  
 船屋のきりし。船屋のきりし  
 船屋のきりし。船屋のきりし

ウツクシク

船

船



大臣より申せしや。あはれいな  
あま此君よ。一夜のお宿を暮らして  
秘曲をも聴聞申せし。例あま

思出 かの蟬丸の建坂や葉屋よ  
て琵琶を弾き給ふ。今この君は須  
磨の塩屋露もたまらぬ軒の板間。  
過ひ難き砦よ。逢ふぞ嬉しかりける

上敷

里離れ須磨の家居の習として。須磨  
の家居の習として。何事を松の柱や竹  
あめ垣ハ一重も。風もたまらぬ痛

地拍子  
1111111111  
1111111111

あま海に遠けれど。はた  
いもなほ聞えたる。このまも葉を  
も。あま聞えたる。このまも葉を  
あま聞えたる。このまも葉を  
あま聞えたる。このまも葉を

歌

いひしき 響聞由きり かも 響聞由なる

半白

夜もきざら 声は響

ち 遊が かくし 師長かん上 此須磨の巻の春

かよ 源氏此浦よ 移され 給ひ 初め

て 世の 味ひの 幸も ち 知ら しく とも

まだ け 志まぬ 旅衣 け とも あり あり 候

の 露の 玉の 緒は け 弾丸 身 一 候

伝ひし 響 浦なる 思ひ 方

よう 風や 吹く 浦は の

音 浦より 琴の 音の 音 浦より

琴の 音の どれ 弾く 味 響の あり

から あり や 村雨の 古屋の 軒の 板庇

目 響の 程の 夜雨や 音 響の 障 あり

ら 響の 音 響の 音 響の 音 響の 音

あいらしい雪 卯かど村雨の降

る程よ。かど隣が—あいらしくし

シラけは村雨の降りどやどやよ。焼茶取り

出—と入—とどろくのだめよ。か

ら— ハイ茶を板屋で暮らす静よ

聴聞申さる。もほちと焼ハ諸共よ

シラ茶取つ。か— 地上か— 地茶碗の

名の。おごも。暮し。居。早。さ。な。だ。て

同。か。い。屋。た。り。 ハ 中 ロ 早 宿 ハ 中 ロ 早 宿 ハ 中 ロ 早 宿

茶の板屋のし。か— ハ 中 ロ 早 宿 ハ 中 ロ 早 宿

あいら ハイか— ハ 中 ロ 早 宿 ハ 中 ロ 早 宿

茶のし。調子の。黄鐘。板屋を。敲く。雨

の。音。ハ。敷。込。し。程。よ。 中 ロ 早 宿 ハ 中 ロ 早 宿

茶の。茶。— ハ 中 ロ 早 宿 ハ 中 ロ 早 宿



それをも  
ニモ

一たもやまのあたりにける堪能あり  
ける事よ所詮渡唐を留まらんと思  
びて塩屋を出て給へどそれをも知ら  
で琵琶の琴の心づつのだいあみまて  
越天樂の唱歌の聲梅が枝よとを  
鶯の巢をくく風吹かざいよせん  
花よ宿の鶯宿人の情のやも知らで

地拍子  
鶯の  
ニモ

弾いたる琵琶のうら旅人の声  
まらる何旅人の声まらるを

何ぞ留め申さぬぞと  
焼の走りより琵琶のうらも声  
袖を唯まけやけや横雲の夜はまだ  
漢一浦の名のあがしておまらる入  
何よ留め給らんまづ此度の帰港

師長  
ツヨク

文上



して。重ねて尋ね申さる。所を名  
のう給入や。今、何やら包む入ま。  
あれ、絃上のまたり。村上の天皇梨  
壺の女御夫婦あり。地上、御身の入唐  
留めしたため。葉の中、まはる。又、須磨の浦。  
教養の昔の夢の昔の昔思ひせむ。入  
とて。まはる。道。まはる。まはる。給よ。まはる。消

まはる。まはる。まはる。給よ

未序中入

後三上  
出端

持これた。延喜聖代の所。讓。村上の  
天白。我ら事あり。その聖代の所  
宇。まはる。唐。まはる。三面の。まはる。を渡  
まはる。絃上。青山。獅子丸。これあり。まはる  
程。獅子。龍宮。入。取られ。まはる。とて  
召。出。弾。まはる。と。まはる。た。る。海。まはる。よ

●笛吟

向ひ。い。ろ。よ。下。界。の。龍。神。た。い。の。向。け。  
 獅子丸持素。仕。れ。獅子丸浮む。  
 と見えろ。獅子丸浮むと見えろ。  
 かど。ハ。大。龍。女。を。り。ま。連。れ。り。ま。連。れ。  
 かの馬。琵琶。を。授。け。給。へ。師。長。賜。  
 たり。彈。き。あ。ら。ハ。大。龍。王。も。絃。管。  
 の。後。或。ハ。鼓。を。打。て。或。ハ。琵琶。

終上

十一

●仕舞

色。の。名。の。員。ハ。獅子團。乱。旋。ハ。村。  
 上の天。白。玉。も。奏。で。給。よ。面。白。かり。け。の。  
 秘。曲。ハ。早。舞。獅子。ハ。文。殊。や。召。さ。  
 獅子。ハ。文。殊。や。召。さ。ら。ん。  
 帝。ハ。飛。行。の。車。ハ。乗。ハ。大。龍。女。ハ。  
 引。か。れ。給。へ。師。長。も。飛。馬。ハ。鞭。を。  
 打ち。馬。ハ。琵琶。を。推。か。へ。て。馬。ハ。

終上

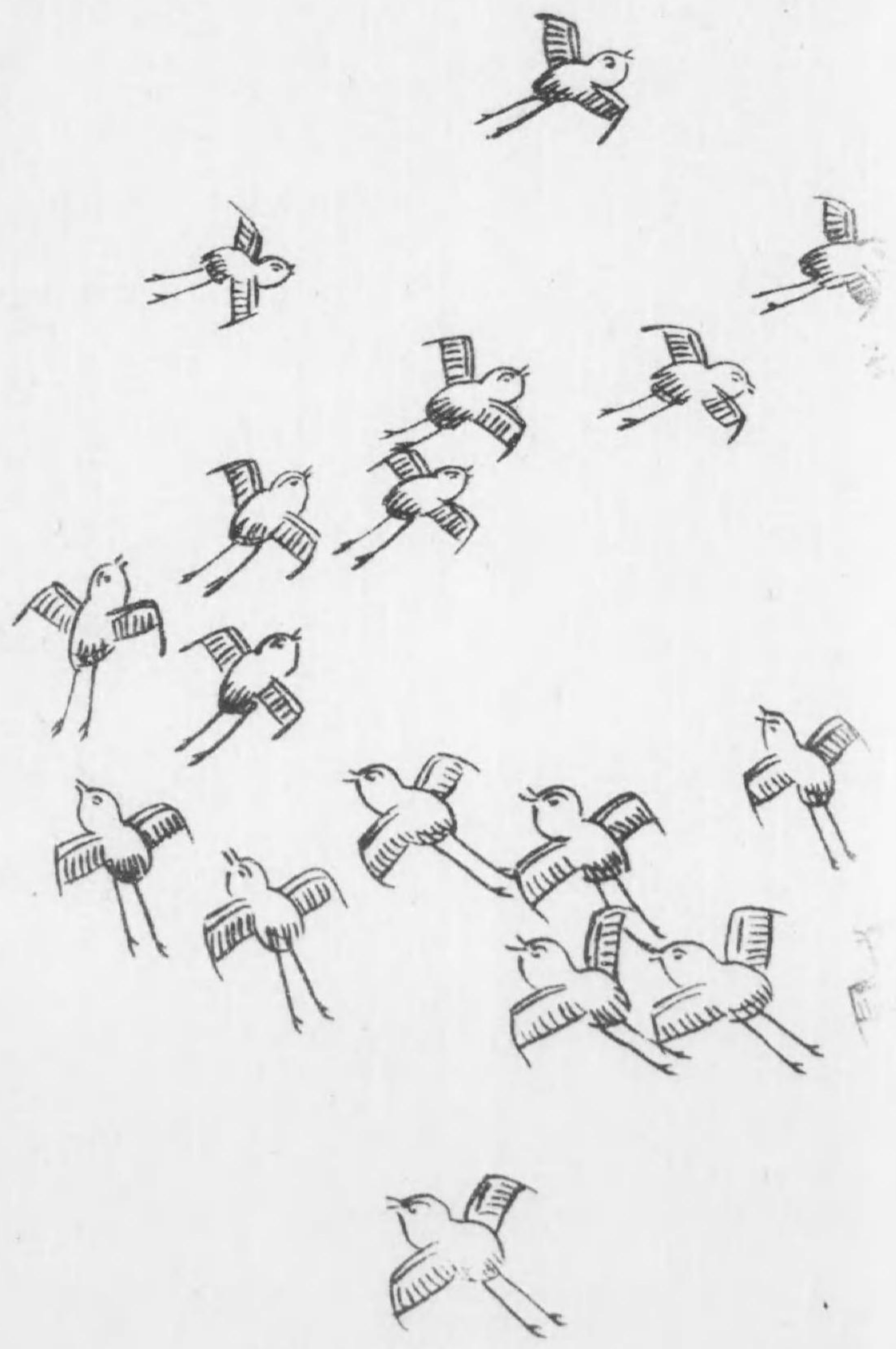
十一

121

一、（一） 漢字を推して須磨の帰路であり  
（二） 漢字を推して須磨の帰路であり  
 一、（一） 漢字を推して須磨の帰路であり  
（二） 漢字を推して須磨の帰路であり  
 一、（一） 漢字を推して須磨の帰路であり  
（二） 漢字を推して須磨の帰路であり  
 一、（一） 漢字を推して須磨の帰路であり  
（二） 漢字を推して須磨の帰路であり

大正十一年二月三十日印刷  
 大正十一年二月二十日發行  
 訂正者 丸岡 明桂  
 相續者 丸岡 明桂  
 發行所 土居源太郎  
 印刷所 鈴木本彌作  
 東京市神田区今小路三丁目九番地  
 東京市神田区東松町十二番地  
 東京市神田区東松町十二番地  
 東京市神田区東松町十二番地  
 東京市神田区今小路三丁目九番地  
 發行所 觀世流改訂本刊行會  
 電話九段 二二〇五番  
 振替東京 一三四七五番





終

